報告者として大会に参加して

慶應義塾大学大学院　南　裕子

私は今年の８月に村研に入会したばかりで、初めて参加した村研の活動が本大会となった。研究通信の 177号で大会のスケジュールを知って、大規模なゼミ合宿のような開催形式にまず驚いた。どうも外から見ると村研自体が一つのしっかりしたムラ社会に思われ、New Comer としては実を言えば恐る恐る接近したのであった。

しかし、実際に大会に参加してみると、この開催形式だからこそ得るのもが多かったように思う。一泊二日の間ずっと顔を合わし続けるということは、他学会に比べて二つの点でより大きなメリットがあるように思えた。第一に、報告が大会のフォーマルな質疑応答の場だけで終わることなく、議論が時にはお酒が入ったりしながらも続けられる可能性をもつことである。そして第二に、私のような駆け出しの研究者にとっては、普段なかなかお目にかかれない諸先生方と単なる挨拶だけでなく、いろいろお話ができる場や時間が多いというのは嬉しいことである。また、特に自分と同じように海外地域研究に従事している方とは研究上の情報交換や示唆を受けることも多々あった。

今回は一日目の午後に「人民公社解体後の中国農村社会の再編成」というタイトルで報告をさせていただいた。報告の準備をしていて一番楽しみでありかつ怖いのは、報告後にフロアからいかなる質問、コメントが寄せられるかである。今回は、実際に中国でフィールド調査をしていらっしゃる方からは無論のこと、中国が研究対象ではない方からもコメントがいただければと思って大会に臨んだ。結果としてはそのようにはならず些か残念であったが、そのことが海外地域研究をいかに学会報告するかという問題を考え、反省するきっかけを私に与えてくれた。確かに自分の経験からしても、他地域の専門的な研究を聞いたときに、いわばその地域についての素人としてはコメントを出しにくく、まず基礎的な事実の確認が問題になったりする。しかし、特定地域の非常に個別的に見える研究の根底には、同じ農村や農業の研究者の間で共有され広く議論が可能な問題も存在するはずである。学会という場では、そのような方向性を意識した報告を行うことが求められるのであろう。ところがこれはまさに、言うは易し、されど……という問題である。そこに至るまでには、やはりまず報告者と聴衆の間で、議論の前提が共有されることが最低限必要である。報告している自分の頭にはこれまで研究対象として勉強し体験してきた中国及び調査地の村についての像が明確にある。しかし、報告を聞く側は、本人にとってなじみのある日本その他の地域が認識の基準となり、その報告を理解しているのではないかと思う。そうした場合、両者の頭の中で形成される像にズレが生じるのは避けられない。だから、この点をしっかりと認識して、20分や30分という非常に限られた時間内ではあるが両者の一致を図らねばならない。それをいかに行うかということが今後に向けての課題である。

さて、最後に今大会の内容についてであるが、農業における女性というセッションは、農村研究において個人をいかに分析するかという方法論上の問題と家族農業経営を支える思想、価値の問題を改めて提起した点で興味深かった。私自身は、転換期にある日本の農業、農村が現在直面する深刻な問題が村研の場ではどのように扱われるのかにも関心があったため、今回女性が議論されたこと自体を言わば知識社会学的に考えてみたいと思いつつ大会会場を去った次第である。